

論

文

注 意

1. 監督者の合図があるまでは問題冊子と解答用紙を開かないでください。
2. 解答はすべて解答用紙の決められた箇所に記入してください。
3. 試験開始後、解答用紙に氏名・受験番号を記入してください。
4. 試験問題はこの冊子の1～9ページに記載されています。
5. 試験終了後、この問題冊子は持ち帰ってください。

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

現在テレビなどで報道されるヤングケアラーからおそらく視聴者や読者が受けている印象と、現実のヤングケアラーのあいだにはずれがある。ヤングケアラーを専門的に論じる研究者や支援者には周知のことであるが、ヤングケアラーと言われる人々の家族背景はきわめて（A）である。ところが報道では身体的な病や障害を持つ親やきょうだいを介護し、家事代行をするヤングケアラーが登場することが多い。報道の①先鞭を切った二〇二〇年三月二二日の毎日新聞の記事でも認知症の祖母を介護する男性が取材を受けていた。

男性が心身に限界を迎えたのは高校2年の2月。朝起きようとすると全身が重くて動かない。何もする気にならず、学校に行けなくなった。休学して介護に専念すると、「友達と自分は住む世界が違う」と比べることがなくなり、イライラは楽になった。復学を目指したが、祖母の症状はさらに悪化。男性は1年後に退学した。制服など高校の物は全部捨てた。（毎日新聞「クローズアップ…ヤングケアラー 一〇代介護、可能性奪う 心身疲弊、学業諦め」二〇二〇年三月二二日東京朝刊…二〇二一年一〇月四日閲覧）

毎日新聞のその後の連載「ヤングケアラー―幼き介護」（二〇二〇年五月五日～六月二七日）では統合失調症、高次脳機能障害、重い障害を持つきょうだいの介護といった多様な状況が報道されていたが、断片的な報道でのみこの言葉に触れた人は、親の体が不自由であるため家事を手伝って疲労している子どもの姿を思い浮かべるのではないだろうか。

今までインタビューをお願いした何人かのうちの一人はくも膜下出血で倒れた母親の介護を担っていたので報道の姿とかぶるが、数人の母親は深刻な物質依存であり（AさんとBさんの母親は覚醒剤依存、Cさんの母親は睡眠薬依存）、日常生活と子どもの養育に困難を抱えている。BさんとCさん是不登校を経験している。このような家庭はこの地区では（B）的な事例であるが、報道で作られたヤングケアラーのイメージとは少し異なる。私がお話を聴いたなかでCさんは疲弊しきっていたが、それは母親が頻回な自殺未遂を起こすなかで束縛され②続けていたことについてであり、身体的な疲労ではなかった。もちろん疲労しきっている人たちが典型例でありうることは否定しない。しかし

ヤングケアラーの実情はそこに収まるものではない。

たとえば、^{*}要対協で強く虐待が疑われていた家庭で、「やんちゃ」と言われる中学生男子が、乳児の妹を抱っこして地域の居場所を訪れる様子を私自身も目にするところがある。この場合、親へのサポートも彼自身やきょうだいへのサポートも必要である。「ヤングケアラー」と聞いて、学校や路上で「いらんことして」生活指導の教諭が呼び出して面倒を見るような、やんちゃな少年を思い浮かべる人は少ないのではないだろうか。ケアを受ける家族もさまざまであるし、ケアを担う子どももさまざまである。⁽¹⁾それではこのとき何が子どものケアを導き出すのか。

ケアとは、もともと家事労働のことではなく「気づかう」「心配する」という動詞である。この動詞にさかのぼってヤングケアラーを考えたほうがよい。ヤングケアラーとは何よりもまず家族のことを心配する存在なのだ。

母親が覚醒剤依存だったBさんは次のように語った。

Bさん 母親はめっちゃ多分、好きやったんですね。保育園生のときなんかは母親にべったりみたいな感じ。母親から離れたくないみたいな感じなんですけど。小学校に入ってから別離したくないってわけじゃないけど、でも、好きやったし。母親がしんどい思いしてるんやったら、心配になるしみたいな感じですかね。

覚醒剤依存のなかで^③ヒンパンに替わる「やくざ」のパートナーから暴力を受ける度に夜逃げを繰り返し、毎晩カップラーメンで飢えをシノ^④ぐ貧困のなかでBさんは生きてきたのだから、「めっちゃ好き」というこの言葉は意外に感じる人もいるかもしれない（しかしこの点ではBさんは西成のヤングケアラーの典型だ）。ともあれ「母親が自分を一番に思ってくれた」ことと、母親が「心配になる」ことが、母親のそばにBさんが居続けた理由である。私がインタビューをとった人のなかで「ヤングケアラー」と呼びうる人のほとんどが、労働よりも前に家族のことを気づかい心配する人だった。

ヤングケアラーについての量的調査は、家庭でどのようなケアをどのくらい「行い」それによってどのような影響が「生活」に生じているのかを問う。教員や援助職が調査に回答することが多いので、子どもの「情緒不安定」やどのように疲労しているのか、「表情が暗い」というような調査項目が入ることはあるが、ヤングケアラーと見なされた子どもが実際のところどんな思いで状況を生き抜いているのか、家族をどう思っているのかについては問われることは少ない。そして、仮に「どのような感情なのか」問われたとしても、子どもがその瞬間に本心を明かすとは限らないのではないだろうか。

もちろん「気づかい」や「心配」だけではない多様な感情の動きがある。⁽²⁾「ヤングケアラー」という言葉はこのような強い感情を覆い隠してしまうかもしれない。先述のBさんの友人のCさんがトウトツにBさんについて語った場面では、Bさんと逆の感情が語られた。

Cさん お母さんに対して『死ね』って、本当『死ね、それぐらいやったら』って思ってたけど、〇〇「Bさんのファーストネームを呼び捨てにした」がお母さん「が踏切に飛び込んで」亡くなったときに多分、一番最初に電話してくれたの私やって。

メールしてたんですよ、ずっとその日は、〇〇と。「今、おかんが買い物行っただわ」みたいな。だから「買い物行っただわ」までやっているんですよ、メールを。で、『返事返ってけえへんな』って思ったら、電話かかってきて、「おかん死んだわ」みたいな。めっちゃ泣いてて。

『ああ結局、「母親が亡くなったら」苦しいんやん』って。だから、『私は』お母さん殺すまい』と思ったんです、私は。〇〇見てっ
て言ったらあれですけど。『結局、苦しいんやん』と思って、死んでも。生きてても苦しいし、死んでも苦しいし、『私なんて生まれてきたんやろう?』って。
たんやろう?』って。

Bさんの母親が衝動的に自死した日、知らせを聞いたCさんは「死ね」と思っていた母親を「殺すまい」と思い直す。しかしそれは「生きてても苦しいし、死んでも苦しいし、『私なんて生まれてきたんやろう?』という行き場のない困難のなかにあるがゆえの決心だ。(母親が過量服薬するたびに救急車を呼んでいた) Cさんはすべての家事を担いながら母親に束縛され家から出られなくなっていたのだが、家事労働

の背景にあるのはこのような憎悪だ。^⑥

愛情や憎悪を感じるヤングケアラー本人だけでなく、さらには子どもにケアを受ける親もまた不安や怒りといった強い感情に飲み込まれている。感情が場を支配しているということは、個人対個人のあいだのやりとりであるというよりも、まずは感情的な巻き込みが一つの「場」を作り、そこからケアラーとしての行動が発生しているということを示すだろう。依存症や精神疾患などの困難な状況があつて、そこで強い情動がぶつかりあう場がひらかれ、そのなかで家族メンバーそれぞれの行動が自ずと決まってくるのだ。ヤングケアラーとはその帰結のうち或るグループを括りだして与えられた名前である。

〔注〕

*要対協——「要保護児童対策地域協議会」の略。虐待を受けている子どもなどの適切な保護、支援等を行うため、関係する機関等により構成される機関。児童福祉法により、地方公共団体はその設置に努めることとされている。

（村上靖彦「記号が照らすすき間、記号から逃れる本人…大阪市西成地区でのヤングケアラー調査をもとに」石原真衣編著『記号化される先住民／女性／子ども』青土社、二〇二二年より抜粋）

問一 文中の①②⑥の語句の読み仮名を書き、③④⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

① 先鞭

② 束縛

③ ヒンパン

④ シノ（ぐ）※「ぐ」は送り仮名

⑤ トウトツ

⑥ 憎悪

問二 文中空欄の（A）（B）には、それぞれどのような語句が入るか、文中より最もふさわしい漢字二字を抜き出して記入しなさい。

問三 傍線部(1)「それではこのとき何が子どものケアを導き出すのか」とあるが、この問いについての筆者の見解はどのようなものか。本文に即して七〇字以内で答えなさい。

問四 傍線部(2)「『ヤングケアラー』という言葉はこのように強い感情を覆い隠してしまうかもしれない」とあるが、それはなぜか。本文に即して八〇字以内で答えなさい。

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

＋現状を把握するために

実証知見を確認する前に、研究結果を適切に（A）するために最低限踏まえておくべき考え方をまとめよう。まず、この1億を超える人口で構成される社会はあまりに複雑で、「現状」把握は常に不足している。

たとえば、JR新橋駅前のスーツ姿の男性にインタビューしても、その意見は日本全体を代表しない。数を多く取ったところで、新橋駅を利用しているサラリーマンの意見と言えるかも疑わしい。なぜならインタビューする時間帯によってそこにいる人たちの特性は異なるだろうし、見知らぬ他者に話しかけられて応ずる人の回答に限定されるからだ。多くのオンライン調査も同様で、モニター登録者や特定のページの閲覧者かつ調査に回答する人たちの見解に過ぎない。人々が何を考えているか知りたければ、あらゆる地域・年齢・性別から声を拾えるように無作為に抽出しなければならないし、恣意的な回答を引き出さないような設問の工夫、それに調査対象者の特性に偏りが無い回収も必要となる。

社会調査の計画・実施には専門的な知識と経験、多くの関係者の時間と労力、それに多額の費用がかかる。結果として、信頼できる、それも日本全体の「現状」^②を俯瞰するような調査は数少ない。本書が利用する「社会階層と社会移動に関する全国調査（SSM）」^③以外では、かなり限られる。

たとえば、わたしたちは、1970年代の人々が何をどう感じていたのかを知る術を、ほとんど持たない。もちろん、当時のテレビ、新聞、雑誌などによる言説の変化などを追いかけることはできるが、それはだいたい限定されたものだし、メディアで発信するのは基本的に高学歴「エリート」だ。これらは特定の層の人たちが取材し解釈した結果であるし、海外からの影響も含めて時代の空気によって何に着目するかもだいたい変わってしまう。現在、（B）で選んだ人々に「70年代、〇〇についてどう思っていましたか」と尋ねることはできるが、記憶は不確かであるし、当時の高齢者などすでに亡くなった人々の（C）はわからない。

これは教育分野でも同じで、過去、それに現在の多くのことはわかっていない。たとえば、学力がどう変わってきたかも、まっとうな調査

手法に基づいたものは、ここ数年のものを除くと存在しない。文部科学省による全国学力・学習状況調査（全国学力・学習状況調査）は2007年より毎年行われているが、問題難易度が年度間で比較可能ではないので、平均点が上下しても「学力が変わった」とはいえない（川口2014など）。学力低下が議論の的によくあるが、2010年代以前から実施されていて信頼できる全国規模の学力調査は国際機関が主導するTIMSSとPIISAだけである。だから、たとえば2010年代の中学生とその親世代にあたる1980年代の中学生のどちらのほうが高学力なのかはわからない。「昔と違って最近の子供は……」と言ったところで、社会科学的に裏づけのある比較可能なデータは存在しないのだ。

要するに人間社会はあまりに複雑で、すべてを把握することはそもそもできず、不足した人材と予算の中で調査研究が行われてきたので、信頼できるデータは数多くない。^④ダトウな手法で行われた調査であっても、質問数と回答選択肢を増やしすぎると調査対象者の負担が大きくなるので、限られた事項しか把握できない。そう、みなさんが抱く多様なギネン^⑤すべてに應えることができるほど「現状」はわかっていない——わたしたちはわたしたちを知らないのだ。

さらに話を複雑にするのが、因果関係の特定の難しさである。たとえば、学習時間と合格した大学の偏差値に相関関係があることがわかっていても、それが因果関係なのかどうかはわからない。長い時間学習するから合格したのか、それとも長い時間学習するような性格だから合格したのか。様々な可能性があり、特に教育分野では因果関係の厳密な特定はかなり難しい。

ただ、観察データで因果関係の特定が難しいから——わからないことだらけだから意味がないかというと、そうでもない。意味のある調査はできる。国内外の理論や実証研究の知見を基に、観察する項目の精密化や偏りがない回収など調査実施の地道な改善の積み重ねの上で、結果に留保を付けつつ誠実に解釈すれば有意義なはずだ。

↑長期的な「答え合わせ」とメカニズム解明

本書についていえば、第1章は、主に大規模な社会調査であるSSMの2015年データ（2015SSM）を用いている。これは調査した時、その一時点の観察データだ。観察できていない要素が多くあるので、SSMデータによれば父と子の学歴に関連はあるが、これは（D）関係（父子の学歴が同一もしくは近似している）としか言えない。父の学歴（以下、父学歴）と相関する観察されない要因が子の学歴（以

下、子学歴）に影響を与えている可能性を排除できないので、（E）関係（父学歴が子学歴に影響している）を立証しているわけではない。しかし、「2015SSM」は2015年時点で20歳から79歳までの日本全国の住民を母集団とした無作為抽出による大規模調査であるので、その結果は幅広い年齢層と全国を代表するという強みがある。

第1章で示すように、どの世代であっても父子の学歴に関連がある——父学歴という本人が選択したわけではない「生まれ」によって子の最終学歴が異なるという実態を、全国調査で示す意義は大きい。なぜならこの親子学歴の関連は、たとえば、現在の60歳もかつては20歳の若者だったわけで、40年前の研究者の視点からすれば「若者」がどのような人生を実際に送ったのかの「答え合わせ」なのだ。社会は複雑なので予測は難しいが、このような「答え合わせ」をするのにSSMデータは極めて有用だ。

それに、これまでの研究によって、どのように父学歴が子学歴に影響を与えるのか——関連メカニズムが示されてきたので、援用しながらデータの解釈はできる。たとえば、父が大卒であれば、それが子に期待する学歴の基準となり、学習塾の利用にも積極的となり、子も進学高校を経由して大卒となる。この一連のメカニズムを支持するようなデータであれば、いくつも存在する。換言すれば、親の学歴（以下、親学歴）が子学歴に与える因果的影響を立証することはできないが、親子学歴に関連があるという実態（*what*）を示し、様々な理論や研究を援用しながら、なぜ（*why*）／どのようにして（*how*）関連が生じたのか——学歴再生産メカニズムを説明する「試み」をすることはできる。

（松岡亮二『教育格差—階層・地域・学歴』筑摩書房、二〇一九年より抜粋）

問一 文中の①②③⑥の語句の読み仮名を書き、④⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

① 恣意的

② 俯瞰

③ 言説

④ ダトウ

⑤ ギネン

⑥ 援用

問二 文中空欄の（A）（B）（C）（D）（E）には、それぞれどのような語句が入るか、文中より最もふさわしい語句を抜き出して記入しなさい。

問三 傍線部「ただ、観察データで因果関係の特定は難しいから——わからないことだから意味がないかという、そうでもない」とはどのようなことか。一〇〇字以内で説明しなさい。